

サイコロ

ISHIKAWA MERIYASU MAGAZINE

Special Feature

“ 60周年に向けて動き出しました ”



Column

私と石川メリヤス

News

〔新商品〕 車内拭き手袋／ホイール磨き手袋



1.



2.



3.



4.

初めての単独出展で 改めて気づいたこと

使う人のためのモノづくり。2021年10月18日から20日に開催された「IFFT/インテリア ライフスタイル リビング」に出展し、65年前の創業時から変わらない石川メリヤスの存在理由に改めて気づくことができました。

石川メリヤスのブースを訪れてくれた方は3日間で234人。半数ほどの方とは名刺交換をして会話をしました。

印象的だったのは、業種や規模を問わず決定権や目的意識を持った方が多かったこと。求めている商品が明確で、「軍手の指先を取ることができるか」「アウトドア用にアレンジしたい」といった具体的な要望があるのです。そのうち20社ほどと展示会後

もやり取りさせていただいています。

展示したのは石川メリヤスの定番商品であるサイコロ印作業用手袋です。創業当時からの職人向け定番商品ですが、昨夏からはデザインに工夫を加えて一般向けにも販売しています。

一般の方に届けるには販路を変えなければなりません。そのためにはユーザーに近いところにいる小売店の方々とのおざっばらんな対話が不可欠。こうした意図をくみ取ってディスプレイの設計から施工までを担ってくれたのがT HOUSE（京都市）です。

T HOUSEの名嘉太一朗さんと谷口孝さんは2回も石川メリヤスを訪問してくれました。今回の展示会を担当した石川絵梨および社長の太宮裕美と打ち合わせを重ねつつ、工場を「現調」（現場調査）。どんな仕事でも現調を大事

にしていると谷口さんは説明します。「メールやZoomだけでは、空気感や素材感を把握するのは難しいからです」

石川メリヤスの工場には、鉄工所などのプロ用に出荷するサイコロ印の俵（手袋120双をひとまとめにしたもの）が積まれています。谷口さんは「素朴で可愛い」と着目したそうです。「ゴロツとした塊で、軍手のイメージを表現するには素敵な素材だと思いました。展示会場に置いたときに『何、これ？』と足を止めてもらうきっかけにもなり得ます」

ただし、T HOUSEの方針は奇抜でカッコいいディスプレイを作ることはありません。石川メリヤスの想いを立体的な形として具現化することです。名嘉さんは「使う人に長く寄り添うモノづくりだ」と感じ取ったようです。

1. 愛知県西三河地方のリサイクル繊維の歴史を踏まえた石川メリヤスのブース

「サイコロ印」作業用手袋は西三河地方のリサイクル繊維産業に支えられている。その歴史と仕組みを文章で紹介した。「壁の色は白が無難ですが、それでは僕たちに依頼してもらった意味がありません。軍手のナチュラル感を引き立たせつつ、たくさん出展者の中で埋没しない配色を考えました」(谷口さん)

2. ブースの入り口に置いたコーン巻の糸と作業用手袋のダース

来場者が思わず立ち止まるような工夫も重要。「一般的には見慣れていないものを石川メリヤスの工場で見つけてディスプレイしました」(名嘉さん)

3. ディスプレイの什器は塗装していない木の板で統一

「軍手はシンプルで素朴な商品なので、木目を使うことが必然だと思いました」(谷口さん)。DIYやアウトドアでのシーンを思い浮かべやすい展示となった。

4. ループを兼ねたブランドネームタグで使い勝手の良さをアピール

「工業的な雰囲気ではなく女性の目線で、という大宮社長の言葉が僕たちの中にずっと残っていました。展示全体としてはガーデニングをイメージしたつもりです」(名嘉さん)

「サイコロ印を単なる作業用の商品としてではなく、愛情を持って伝えられるよう意識しました」

実際にディスプレイを作る際は、商品を魅力的にわかりやすく見せることを一番大事にしているそうです。サイコロ印は7種類もあるため、その素材や用途の違いを示す必要があります。手に取りやすさや説明文の読みやすさを重視した結果としてこのたびのディスプレイが完成しました。

石川メリヤスは単一商品の大量生産には向いていません。むしろ、「こういうニット製品が絶対に欲しい」というニッチで熱い需要には200双単位の小ロットでも柔軟に应运えてきた工場です。T HOUSEの力を借りて実現した今回の展示会。「使う人のために」という想いを深めています。

私と 石川メリヤス

1962年設立(創業は1957年)の石川メリヤスは2022年に60周年を迎えます。長くお世話になってきた方にお話を伺うシリーズの第1回は岡田完司さん。作業用手袋の糸商(繊維原料商)として、また協力工場として石川メリヤスの設立当初からお付き合いいただいています。

昭和16年生まれ私の私(創業者の石川進)に会ったのが20歳の頃。勤め人として特紡糸やナイロンを御社に供給していました。

実家は機屋(織物工場)をやっていましたが、これからは石川メリヤスのように手袋がいいなと思いました。30代半ばの頃です。進さんが「やれやー。編むだけ編めや。(仕上げの)ミシンはかけてやるから」と言ってくれたので、勤め先からお金を借りて編み機を10台買って夫婦で始めました。自営になったのは44歳の頃です。

糸商としても工場としても、うちの主力取引先はずっと御社です。こんなに長くお付き合いできたのは、だまし合いをしないから。「(石川メリヤスの)売り先がわかっているんだから自分で売ればいいじゃないか」と他人から言われたこともあります。私はそんなことはしたくない。「お前には関係ない」とはねつけてきました。

忙しいときだけいい条件で仕事をもちかけてくるところもあります。でも、御社は何十年も変わらずに同じペースで仕事を頼んでくれる。信用していいな、と思って今に至ります。

私も年齢が年齢なので仕事を辞めようかと思っていました。でも、娘婿が来てくれたので、工場を直して機械を新しくしたところです。



糸へん(繊維業界)一筋60年の岡田さん。
石川メリヤスは三代にわたってお世話になっている。

News

「自分専用手袋を作る」。すべての工程を体験的に理解する社員研修を実施しました

ニット製品の工程は、糸の選定や原価計算も含めた「企画」、商品特性に合った編み機を操作する「編立」、ミシンを使った縫製や糸始末を行う「仕上げ」の3段階に大きく分かれます。社員数25名ほどの石川メリヤスではそれぞれに専門チームがあり、通常は他のチームで働くことはありません。

しかし、前工程や後工程を理解することはより良い商品づくりに不可欠です。今年6月の社員研修は手袋の企画から仕上げまでを一人ひとりが行いました。まずは社内の編み機や糸の種類と特性を学び、自分や家族のために作りたい手袋を企画。作成作業では5〜6人ずつで4班に分かれ、それぞれの担当工程を2日間にわたって教え合いました。

作った手袋は機能や用途を一人ずつ発表。ユニークなアイデアや意外なほど完成度が高いものがあったモノづくり談義が大いに盛り上がり、期待以上の研修成果を上げることができました。



Editorial Note

「無縫製の価値と未来」と題して、完全無縫製の肌着に特化した新ブランドを発表した5号を発行したとき、本誌の役割は終わったと感じました。アートディレクター相田貴子さんの力をお借りしながらも制作には労力がかかり、燃え尽きてしまったという一面もあります。でも、石川メリヤスは来年で設立60周年を迎えます。創業当時から作ってきたリサイクル繊維を使った作業用手袋を一般向けに販売するために展示会にも出展しました。社員からは新商品の企画も上がって来ています。こうした動きを広くお伝えしなければと思い直し、6号を発行しました。10号までは続けたいと思っています！（大宮裕美）

〔新商品〕

車内拭き手袋／ホイール磨き手袋

左記の社員研修で作った手袋のうち、特に優れたものを商品化することにしました。普段は内職回り担当の飯場美幸が「車好きの夫のために」と考案したのが車内清掃用の手袋です。埃が付着しやすく柔らかいので、カーナビの画面をサッと拭くのにも適しています。

自身が車好きである、編立担当の浅井雄三が企画したのはホイール磨き専用の手袋。最大の特徴は薬指と小指だけ長くしてあること。これを他の指でつかみ、ホイールの外から見えない部分もきっちり磨きたい。浅井のマニアックな願望が商品に結実しました。



厚さや指の長さなど、飯場の「思った通りの商品」ができました



ソロキャンプと車が趣味の浅井。「何も考えない時間が好きです」



Credit

編集・執筆・撮影・発行 石川メリヤス有限会社
Art direction & Design 相田貴子 (Consulting Design Tokyo)

2021年12月発行

冊子名『サイコロ』とは

「メーカーの基本は何よりも品質」。
初代社長の想いが込められた創業以来の作業用手袋「サイコロ印」のブランド名から名付けました。
本冊子では、この精神を守りつつ、石川メリヤスの「いま」をお伝えします。

商品問い合わせ&注文先

石川メリヤス有限会社

〒444-0515 愛知県西尾市吉良町富好新田紺屋堀 27-2
TEL 0563-32-0420 FAX 0563-32-3066
E-mail info@ishimeri.com URL <https://ishimeri.com>